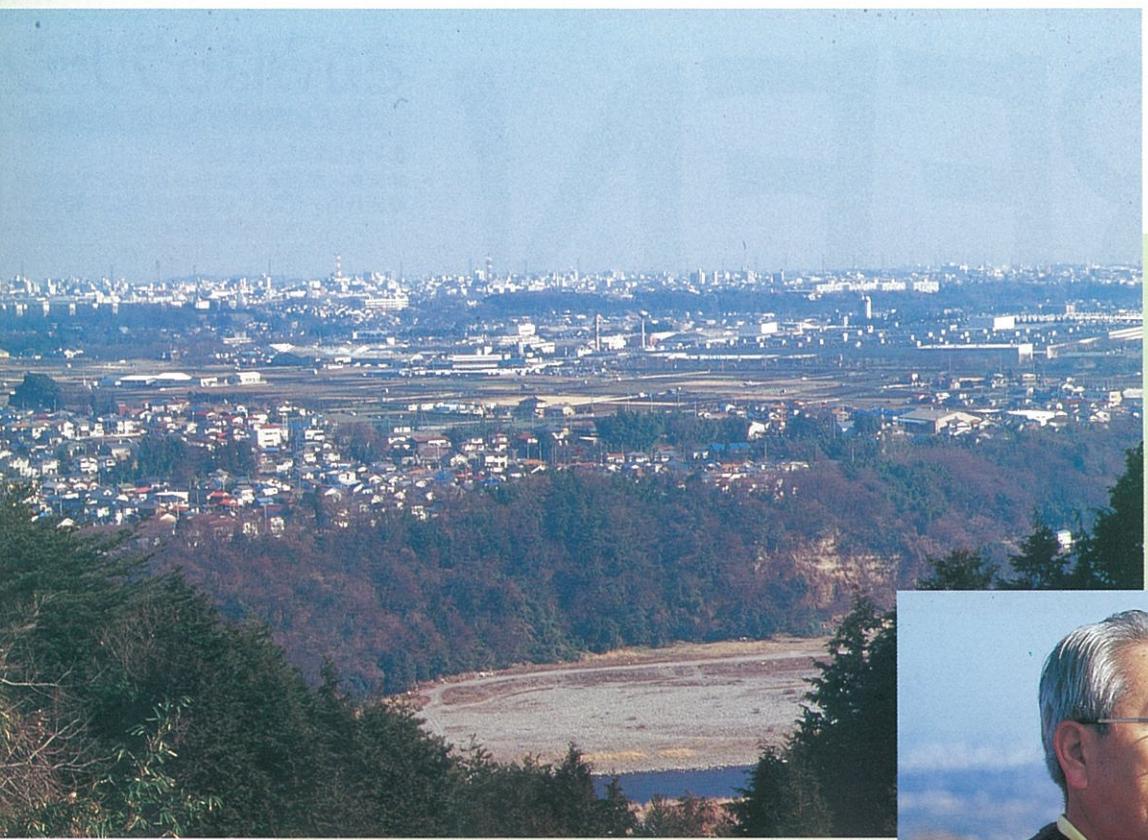


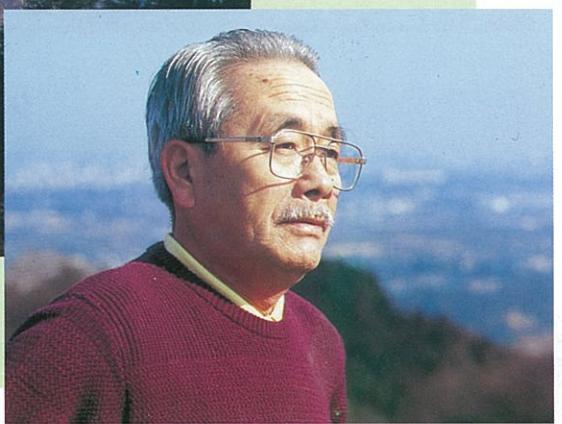
GREEN TALK

グリーントーク・いま緑を語ろう

野草と遊び、野草を撮影 自然大好き人間の野草アルバム



●小倉山から見た相模原市内



●オオイヌノフグリ

のう」と名づけられたそうです。それにしてもイメージが悪すぎますね。利玄先生はそれを避けて空色小花としたのでしょうか。このかわいいスターは、明治の初めに密入国した青い目の帰化植物です。在来種のイスフグリを押しのけて、それと気づいたときは日本全国に広がっていたそうです。

植物の名前、特に野草（雑草）には奇妙な名前が少なくありません。数が多いので思いつき、苦しまぎれにつけたのか、ヘタソカズラ、ママコノシリヌグイ、アキノウナギツカミなど、ほんの一例です。

野草ウォッチングの七つ道具は、双眼鏡、カメラ、望遠レンズ。いつも車に乗せています。小さなルーペも欠かせません。ナズナ、ハコベなど小花の群がりを拡大して見ると、かわいらしさが倍増するからです。野草といえども、紫色の花をルーペでのぞいてご覧なさい。ランに似た花形が浮かび上がり、ドキリとするほど妖艶です。

日ごろ見向きもしない野草を相手に、野草と遊び、野草を撮影する私の趣味は、神奈川新聞の紙面に連載した「相模野の山野草」（春編・秋編）シリーズが始まりでした。博物館準備室（現建設事務所）の植物博士や相模原山草会・佐伯徳造会長のお知恵を拝借、連載は八十回を数えました。その後、やみつきになつて野草ウォッチングを続け、撮りこぼした野草を探し求め、不出来な写真の撮り直しを進めています。

こうして撮影した作品をもとに、野草につわる短歌・詩・俳句、エピソードなど資料を集めも趣味の一つと言えるでしょう。興に乗ると勝手に相模野の「三名花」とか「十花選」を選定したりして……。

道ばたの名もないような野草（名前はちゃんとあります。知らないだけです）調べていくと、かなり話題を秘めています。それを私なりに発掘し、なるほど、そうか、不思議だなあ、と教えられることばかりです。根ざす地の温（ぬく）みを感じ・いち早く空いろ花咲けり・みちばたひなたにタづける風冷えそめぬ・みちばたの空いろ小花（おばな）・みなみなつぼむ

大正時代末に没した木下利玄は、春一番に花をつけるオオイヌノフグリの愛らしさを称えました。俗語・口語を使い独自の歌風で知られた歌人ですが、この野草の本名には触れていません。

松井幸夫（神奈川新聞社顧問）

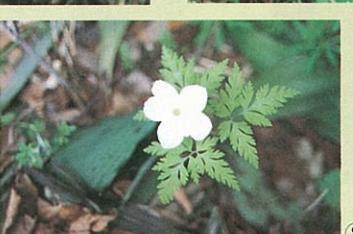
昭和五年生まれ。社会部記者、川崎支局長、通信部長、編集局次長、取締役相模原総局長など歴任。ライフルワークとして丹沢山地、相模川、相模野の自然史に取り組んでいます。相模原市田名に在住。



③



①



②

①ツリフネソウ（釣り船草）＝湿った所に生えて、夏のころ紅紫色の花が帆かけ船を吊り下げたように咲いて涼しげに見える。（上溝で）
②イチリンソウ（一輪草）＝一茎一花。四～五月、雑木林や竹やぶの中に群がって生え、ひつそりと白い花一輪をのぞかせる。（当麻で）
③フデリンンドウ（筆竜胆）＝春に咲くリンドウで、明るい林の中では筆の穂先に似たつぼみがふくらみ、コバルト色の花が開く。（大野で）

こんな簡単撮影でもサービス判サイズの安上がりな野草アルバムができます。撮影地、年月日、有名な短歌、俳句などメモふうに記しておくのも楽しみなものです。

野草撮影のカメラ技術は、さほど難しくありません。接写が可能な35ミリ一眼レフなら十分で、カメラを被写体ギリギリに近づけるのがコツです。クローズアップレンズも用意していますが、あまり使つたことありません。